

それだけではなく、彼らの間の目が交感する世界はあらゆる知識と想像を離れ、一度も彼ら自身に現在に留まらず、彼ら自体の生が途切れることなしに動き続けて行くことよって生きている事実につきり浸っていた。

インドの地に住む人々の目はそもそも誰の目であれ真理を湛えており、深い思索を湛えている。たとえ密林の果実を摘むドラヴィダ族不可触賤民だとして彼らは最も高邁な哲学的な模索と体験の靈魂を持つているのだ。善財は彼らとより一層深く交わりたくはなかつた。それは全く突然の考えだつた。

なぜなら、彼は彼の長く長い真理の旅行を通じて学んだ事々の途方もない量とは違つて、今やその量をしきりに減らすのを願つているためだ。それで彼は彼らの目の光が語つている前生多生と未来際の真理展開が見せてくれる宇宙的な壯觀を生まれながら備えたのを努めて気づかぬふりをした。

彼は表面には恐ろしげだが、心の内はこの上なく純朴さに満ちている彼らの前からさつさと歩み去つた。彼らは道を開けてくれた。背後で善財が理解できぬ声が聞こえるようでもあつた。言わば道を間違えて踏み込むと苦勞するだろうという程度の内容であろう。

善財はこの世界に対してむやみに知つてはならぬことが多いと考えた。それはやがてブツダが彼の八十の高齢に至り入寂直前に見せる「私はただの一言も語つたことはない」という、最後の自己否定ともあらかじめ連結される事柄かもしれない。これまで知つたことが今や彼には新たな未知の前で何でもないので悟つた。

善財が行かねばならぬ道はこれからだ。彼が行かねばならぬ世界への最初の展望に違いない。入つてしまつたことなどは、彼が行かねばならぬ世界への最初の展望に違いない。

幼い旅人は今や彼の莊嚴でさえある旅人の道を終えた。最初の文殊菩薩と最後の普賢菩薩までの長い長い巡礼は一つの帰結として彼を菩薩の境地に到達せしめたのだ。今や彼には果てしない自由があり、全然捉われぬ選択の任意としての自由がある。それで彼は海の向こうの全く遠い所の世界に行き、その多くの衆生たちと会えるようになったのだ。これまで彼の師匠はたとえ数々の階層と数々の種類の人々だったが、ひとえに彼を教えてくれた師匠だつた。

しかしこれから彼が行って会う人は師匠ではなく衆生であるはずであり、その衆生の本性こそは仏だと言う時、彼が究極的に会うのは数多くの仏であるのだ。

海の向こうにもこの世界は果てしなく広がっている。インドの地の何倍にもなる地があり、その地さえ三千大千世界の至極微々たる一部であるのだ。

幼い菩薩はそんな世界に行き始めた。そんな彼が海の真ん中で再びベンガルの海の海岸線の港に戻って来たのは、彼が行かねばならぬ世界への巡礼に先立って彼が知ること以前、彼が知ること以後の、その深奥い未知の暗やみに対する最も謙虚な予感の中で、彼自身を少し「清浄なる無知」にさせようというのかも知れない。恐らくこの世の中で最も高い決断は、決断ということさえ知らない状態の純粹な自動でありもするのではないか。

ベンガルの海の方の夏はインドの地獄といえる夏にもかかわらず、洪水の後だからなのか夜には涼しい地方だった。善財は衆生とはいかに彼の心識と体の戒定を修めるかに従って全ての可能性以上の可能を会得するというのをよく知っている。それで人々が語る異蹟とか神通がそんな境地では、一つの日常に過ぎない。天眼、宿命、漏盡の神通は仏の境地では一呼吸と一息に過ぎぬ知恵の戯れである。

彼が一日だか二日だかの森の道に入って行き、一人の幼な子に出会った。その子供は十歳ぐらいだったが泣いていた。

「どうして泣くんのだ？」と言う意味で善財が言うと、「ちょっと前に母ちゃんが死んだ」と、答えた。

「いつなくなつたんだ？」と、再び尋ねて、善財はその子供の母に対する往生を祈ろうとした。その往生の祈願と共にその子供を慰めようとしたのだ。

しかし泣くのをパタリと止めると、再び「すこし前だよ」と答えた。

善財は再び「昨日か？ 一昨日か？」と尋ねた。

そうすると、その子供は、よく分からぬが十年ほどになると言う。善財菩薩はあきれた。するうちに心の内ではた

と膝を打つように喜びが湧き出してきた。

そうだ。インドの地の人々の本性の中では「すぐそこ」が何百万由旬であり「ちよつと前」が十年どころか何百劫なのかも知れない。彼らに時間とは超時間であり、この超時間とは宇宙の実感なしに時間とは単なる砂浜に打ち寄せる波の端の泡なのだ。

そうして零の宇宙が広がり、無量の宇宙と自我が成り立つのではないか。

つとに善財が出会った師匠の中に瞿波（ゴーパー）という女人がいる。彼女は過去の話を善財にしてくれた。母親と娘が共に娼婦だったが、彼らは万人の肉体となることはあつても一人の妻にはなれぬと言ひ、ある王子の求愛を拒絶する。それにもかかわらず、その王子は美しい娼婦を妻と迎えようと心から訴える。まさにこの訴えを省略したまま瞿波の話を終わらせたが、善財はその省略した部分まで推察していた。

そうだ。幼い旅人善財菩薩は今や、彼自身が世界の数々の所を訪ね歩き愛を訴えるのだ。そうして主観（能）と客観（所）を融合する普融無碍門に至り、客体と全体、全体と客体、主観と客観、客観と主観を交代に互いに融合して、それを共に分かち無碍自在の華嚴法界に悟り入つて行くのだ。

しかし幼い境地ではあれ、いかなる底辺の境地であれ、異なつた本性が互いに一致する異体相即は全く同じなのだ。そうしてより輝かしく燦爛たる華嚴は狂気の者のうわ言とブツダの三昧を一つに見ずには、そこにすくつと構えて待つてゐるのは地獄であるのみだ。

幼い旅人はその森の深い所で泣く子供を連れて共に港に出て行つた。

「私と一緒に行くこう」

「……」